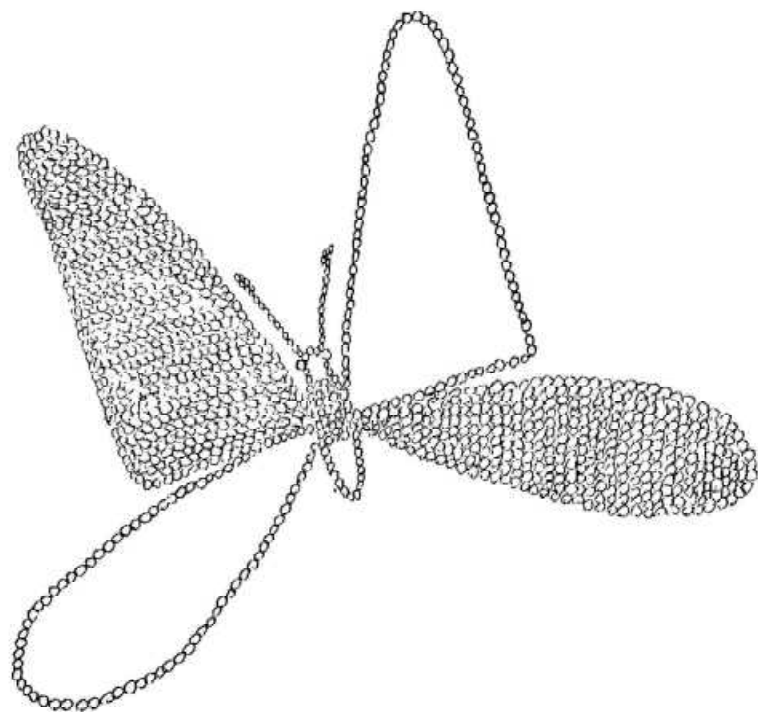


---

すずむし

Vol. 3 No. 12

1953年12月



倉敷昆虫同好会

# 目 次

○ 岡山県のテントウムシ科	小野 洋	頁 1
☆ おとしびみ		
○ 広島府直の蝶追加	古市 紫一	3
○ 愈殺のバエハリテントウ	小野 洋	3
○ 再びモンクサヨウの雌雄別に関する	広瀬 英昭	3
○ イナゲクの果実に関する表2・3	古市 紫一	4
○ 蛭取と昆虫短報 (1)	広瀬 英昭	5
○ オオシオカラトンボのメソモノが捕食	古市 紫一	5
編集後記		6

## 岡山縣のテントウムシ科 蝨

## 小野 洋

種々が県下に於ける昆虫の調査を始めてから日ほお浸き感ば猶りが、現在迄の種々の貴重な記録をそのまゝに放任せしめるのは惜しいことでもあり、今後に於ける調査の原簿に甚だ不便である。何に限らず、その履階としてのまとめと云うものは必野のようになって、現産としては従って序誌的履階のもの、即將来に於けるこの方向への研究進展に對するいしず光的性態のものがほしいように思われる。そこで、県下のテントウムシに關して未だ調査不能分ではあるが、そのような意味で一応二、に發表確報に記録し得ているものの中で種名の判明せる13種について目録をまとめて見た。種名同定は主として日本昆虫圖鑑(1952)によつたが、將來更に完全原目録作製の際にはこの點の分類學門帳の御同定を得て確報にしたい。

本稿をまとめざるにあり、種々御教示を賜つた岡六大原農研安江安宣助教授並びに多くの資料を御提供いただいた青野淳昭氏外諸氏に對して心から感謝の意を表す。

## Family COCCINELLIDAE テントウムシ科

## Subfamily EPILACHNINAE マダラテントウムシ亞科

1. *Epilachna sparsa orientalis* DIECKE ニジユウヤホシテントウ  
 県中部南部にわけて広く分布し、春期より出現。幼、成虫とセナス科植物を如害する。
2. *Epilachna vigintioctomaculata* MOTCHULSKY オオニジユウヤホシテントウ  
 県北部、最北部の赤松山脈地帯に広く分布。前種の分布境界線は大旨姫新線と略一致している(安江、1952<sup>7</sup>)。同じくセナス科植物を如害する。尚県下に於けるこれら2種の分布については現在安江助教授により詳しく調査が進められている。
3. *Afissa admirabilis* CROTCH トホシテントウ  
 北部、最北部でしばしば得られているが、一領内に多くないようである。菅田郡鏡野町中林(安江)、那岐山3月(小野)。

## Subfamily COCCINELLINAE テントウムシ亞科

4. *Rodolia limbalis* MOTSCHULSKY ベニヘリテントウ

\* 安江安宣(1952): ニジユウヤホシテントウ日本産型骨に産す、オオニジユウヤホシテントウ(8): 78-81、

## 2(157)

県下一帯に広く分布。早春より出現し、カイガラムシ類を捕食する。山地帯に於いて比較的普通であるが、南部の倉敷地方でも若干見ることが出来る。

### 5. *Rodolia concolor* LEWIS ムジテントウ

伯耆大山では夏期しばしば見る事が出来るが、県下では比較的個体数は少ない。南部では冬期(1月)越冬中のものが倉敷市外黒田で採集されている(香野)。恐らく県下一帯に産するものと思われる。

### 6. *Rodolia cardinalis* MULSANT ベタリヤテントウ

南部に分布、特に倉敷付近では夏期にしばしばその紫紺色を顕現出来る。ワタワヤカイガラムシを捕食す。

### 7. *Coccinella septempunctata bruckii* MULSANT ナナホシテントウ

極めて普通。早春より出現、アブラムシを捕食する。

### 8. *Harmonia axyridis* PALLAS テントウムシ

各地に最も普通。早春より出現し、アブラムシを捕食する。本種には幾多の種の紋様化したものが見られる。

### 9. *Thea cincta* FABRICIUS キイロテントウ

南部でかなり普通に採集出来る。5月頃より出現。

### 10. *Propylaea japonica* THUNBERG ヒメカメノコテントウ

各地に普通。早春から出現、アブラムシを捕食する。翅類の黒色紋が、会合線の縦線だけを残して消失したセスジヒメテントウをかたまり見られる。

### 11. *Aiolucaria mirabilis* MOTSCHULSKY カメノコテントウ

県下一帯に分布するが山地帯に普通。北部ではかなり普遍的に分布しているようである。山地帯に於いて七ヶ谷局所的に普通に見られ、倉敷地方では黒田、羽島等で採集出来るが、殊に黒田には少なく、4月頃より出現する。南部のものは山地帯のものと比較して橙黄赤紋においてやや淡色を呈する。北部では出現が若干遅いようである。

### 12. *Chilocorus rubidus* HOPE アカボシテントウ

主として中都以北に多く分布するものと思われるが、個体数は比較的少ないようである。中野では箱中尚楽の臥片山で8月に得られている(小野)。

### 13. *Chilocorus kuranae* SILVESTRI ヒメアカボシテントウ

普通。早春より出現し、カイガラムシ類を捕食する。冬期にはイラガのぐらまゆの中で越冬しているヒのがしばしば観察出来る。

以上の外 *Scymnus* 属のもの等の若干の記録がある。

## ◎ 岡山博物同好会第41回例会開催 ◎

下記要領で例会が開催されますので本会の会員の皆様も多数参加下さい。

○ 日時 1月10日(日曜日)午後1時

○ 場所 岡山大学農学部作物害虫学教室演習室



## 広島附近の蝶 追加

筆者は先に広島市附近の蝶について述べたがその後、分布していることが判明した種が2,3あるので追加しておく。

- *Papilio memnon thunbergii* SIT:BOLD  
ナガサギアゲハ (*Papilionidae*)

本種は今夏頃から急激に増加し、生境が縮小となったせいで、筆者も採集し、又市内各所の小学生、中学生の夏期休暇採集中にも多数見出されているので、市内一円に比較的普通に産するものと思われる。

- *Argynnis ruslana* MOTSCHULSKY  
オオウラギンスジヒヨウモン  
(*Nymphalidae*)

本種の分布は藤村操彦氏の御指示によると白木山山裾附近ほどの山裾部に比較的普通に産する種であるので追加しておく。

- *Taraxia hamada* DRUCE  
ゴイシシジミ (*Lycaenidae*)

本種は1953年9月11日、藤本博光氏によって市内に保山で1舎が採られた。その後得られた記録が少ないので、産生の可否については再調査を要するが、一応

記録しておく。

以上の種であるが、何しろ短期間の調査による貧弱なDataをまとめたため、記録もれや訂正する場所が多少あると思われる。もし御覧付きの葉があればどなたか御教示や御叱咤を賜りたい。筆者も、今後更に調査を続け、いざれ、そつと完全なものにしたいと思っている。

(古市景一)

## 倉敷の ベニヘリテントウ

本種 *Rodolia limbata* MOTSCHULSKYはベダリヤテントウと同属で、やはりカイガラムシ類を捕食するものである。県下では一体に分布すると思われるが、中部以北では比較的普通に産見出来、県南では少いようであって、特に倉敷地方では近年見られなくなったものであるが、本年8月上旬倉敷市住吉町岡大太原農研内の大田畑でベダリヤテントウと混在してワタフキカイガラムシを捕食していた本種を採集し得たので一応報告しておく。(小、野、洋)

## 再びモンクサヨウの 此種を雄型に接す

筆者は先に本誌Vol.3 No.8に於て、昨年

#### 4 (159)

6月採集の本種の雌雄型について簡単に記したが、その後偶然に分、再び本種の雌雄型と見られるものを本年10月に採集は出来なかつたけれども、その際に採集する事が出来、通日の感歎を新にした。即ち、10月10日午時12時頃明山市浜原の岡山縣山高等学政校庭でござしくぞれと思われる個体を発見したのであった。当日は晴天であつたが相当に風が強かつた。しりしり萩の花壇のコスモスの花上やその附近には本種やその他の蝶が多数活動していた。筆者の見本個体は萩庭の萩より萩庭を突切つて、風に吹き飛ばされに様は状態で西隣の萩庭の方へ飛翔中のものであつた。採集する事が出来なかつたので結果に細部は観察し得ないが、筆者がその蝶との最近距離2m余で見たところでは、まぎれもなく一方の翅が白、他方は黄の雌雄型であつた。捕獲してはいよいよもせよ、筆者は一度先に報告した雌雄型の採集によって、その飛翔状態をも推察しているから、筆者の目に間違いはない。

一振に本種は極めてその斑紋の変異性に富むもので、採集する個体の中からその変異の著しい個体を採集する事は萩庭のいとまはさななであつて、雌雄型の多く見られるのも敢て奇とするに足らず、もっと注意して多くの個体を採集すれば意外又見つかる種があるのではないかと思ふ。

はる前報告に於て紛失したと記したLeech記載のCopyはその後出て来たので、それにより筆者採集のものとは比較すると、Leechの記載は「有白い翅の色が暗くなる雌であつて級を超えて正色は流の色の中広い縦のすじがある」とあるのみの極めて簡単に記したので充分に説明し得ないが、相当傾向の

異なるものと思ふ。はる前の記載は三崎博士(1938)の日本産蝶類の近知雌雄型目録(第2報) *Zephyrus* Vol. 8, No. 1, 2, p. 18-22より引用したことを附記する。

(広瀬義躬)

### イナダグの果實に

#### 飛来する虫蝶2, 3

蝶が樹々の果實の果實に吸蜜?に訪果することはかなり知られているが、筆者もイナダグのラン類果實に蝶が飛来するのを観察したので、何らかの報告までに記録しておく。はる前、筆者は尾崎郡津賀屋の自宅で行ったもので、今年の10月下旬のDataである。

#### 1. ルリタテハ

果實に飛来するのは、本種が最も多く約10mの高さのイナダグの木の手わりを舞っているものは殆んど本種である。吸蜜の時間は一瞬してはいないが、途中で吸蜜している時は竹竿を少々近づけても飛びたてない場合がある。吸蜜は1頭の果實に対し、1頭が皆通で2頭の場合は未だ観察してはいない。

#### 2. アカタテハ

ルリタテハに次いで多いが、平均4~5頭見られるのみでルリタテハの個体数にくらべるとずつと少ない。

#### 3. キタテハ

本種の吸蜜は稀にしか見ないがそれぞれ2~3例観察している。個体数少く1~2頭。

#### 4. ウラジロシジミ

個体数は多くはいが、今年とせ吸蜜行動は皆通に見られる。吸蜜は蝶以外の他種(例へばスズメバチ)等と同一果實で仲よく!

吸収しているのが見られる。タテハサヨウ科の如く占有性は強く悪い様である。吸収に集中している時は森寺で捕へ得る様である。

5. ヒカゲサヨウ

本箱は早稲の畑イサダクの果實に多く集来するのが見られる。発生の時が日本イサダクの成熟とずれているため日本イサダクの果實には見られなかった。観察例は8月下旬~9月下旬。

以上の他、昨秋メスグロヒヨウモン♀1頭が産卵、吸収しているのを目撃した記録があるが、その後観察し得ないので、本種に本産地に集来する習性があるヤブヤブ吸同である。しかし、いずれにしてタテハサヨウ科のものが多いのは面白い。なお、これらの蝶の間の占有性とかずみわけ等も観察すればよかつたのであるが残念ながら調査し得なかつた。が、他種間との間にはある程度、心理的はずみわけの如きものが認められた。

(古市景一)

汽車と昆虫短報

(1)

筆者は一昨年未だつと岡山に汽車通学しているので、その間時として列車内で面白い昆虫に出会うこともある。以下そのように2,3の例を記して読者の御参考に使したいと思う。

1) ミツバチ

1952年の9月29日岡山駅よりP.M.5:42発角倉線米子行の列車に搭乗し、早稲畑と反対の側の車窓に座っていると、窓ガラスに倒つてジイジイ羽音を上げています時に翅が付いた。よく見ると翅ガラスに付着

すの跡が、又押しこめられた痕跡には10匹余の跡が、合せて100頭余りの跡がこの狭い車窓面にブンブン飛んでいるではないか! 全く驚いてしまった。そしてその蜂の1匹を捕えて見るとミツバチであつた。暗電してから早いP.M.2:36発伯耆線米子行の列車で帰宅した際にその由告げると、沿の郷土には蜂の見た以上のミツバチの大群が岡山駅で飛びまわつていたのであつた。この事實は全く判断に苦しむところであつたが、翌日の山陽新聞の昆虫室補を記者に及んでこの疑問は氷解した。同記事によるとこれは北河原より鹿見島へ歸途中のミツバチが寸度岡山駅停車中にその巣箱が破損し逃したとの事であつた。歸途中のミツバチの巻は逸失したが前年の9月25日付の山陽新聞をみればわかるであらう。とにかく相当数のミツバチが逃げた事であらう。筆者の見たミツバチはどこまで行つたであらうか。終着駅の米子まで逃げ回つて行つたであらうか。

— 未定 — (広瀬義射)

オオシオカラトンボの  
キンモンガ捕食

トンボ類の昆虫捕食例はしばしば観察される例であるが、他の昆虫類に比して晴細日の捕食例は比較的少ない様に思う。

筆者はオオシオカラトンボのキンモンガ *Psychostrophia melanargia* BURLER (ツバメガ科) 捕食を観察したので報告しておく。

時は1953年9月20日 時 広島昆虫同好会の旅学会で広島後佐伯郡瀬野山へ行った際に見つけたものである。山間の谷間のからけた処に、オオシオカラトンボ♀が

2〜3頭見られたが、そのヘギンモンガが1頭、約10羽の高所をゆるやかにひらひら舞翔して来た。これを見つけたオオシオカラ1羽が飛び上り、上から有照を云わさず捕食する。ヘギンモンガを捕食したオオシ

オカラは億々と飛びながら舞っているのに追つたが蝶は依来はがった。それにしても見事な舞ぶりであった。

(古市景一)

### 編集後記

猛烈な滑り込み、ギョツチキタータッチしました。球を落しました。あやうくホームインであります。と云うところで第3巻をどうにか終えました。編者達の多忙の故にとはいふ毎号遅れがうになりました。ことをこゝに深くお詫がいたします。新巻からは、と編者達大いに張切っている次第でありますので、来年も又皆様よろしく御協力下さいますようお願いいたします。ではい、お正月をお迎え下さい。

(日記)

すずせし

第3巻第12号

昭和28年12月30日 印刷

昭和28年12月31日 発行

編集者 小野 洋

印刷者 小野 洋

発行所 倉敷市住吉町

岡山大学大原農芸生物研究所

作物害虫学研究室

倉敷昆虫同好会